

令和6年3月1日(金)

式辞



佐賀県立武雄高等学校長 下村 昌弘

冬来たりなば、春遠からじ。

厳しかった冬も峠を越え、昨日までの雨に洗われた御船山の木々にもそこはか  
となく春の兆しを感じる季節となりました。

「冬」という言葉は、「増える」が語源であるという説があります。一方「春」とい  
う言葉は「膨張する」の「張」、「張る」からきているという説があります。

植物の芽は、「冬」の間に、花を咲かせようとするエネルギーを一日一日「増や  
し」ながら、はちきれんばかりにその芽を「膨張」させ、「春」の訪れとともに一気に  
芽吹き、花を咲かせます。



寒く、厳しい冬が終わり、希望に胸膨らむ春の季節がやって  
きました。この武陵の丘に吹きわたる風にも冷たいながらも心  
地よい柔らかみを感じられるようになりました。

こうした中、武雄市教育長 松尾文雄様、武陵会会長 徳永壮太郎様、PTA会  
長中川内昇様をはじめ、多くのご来賓の方の臨席を賜るとともに、たくさんの3年  
生の保護者の皆様のご参列を得て、本日ここに令和5年度佐賀県立武雄高等学  
校第15回卒業証書授与式を挙行できますことを心より感謝申し上げます。

本日めでたく卒業される221名の皆さん、そして保護者の皆様、ご卒業おめで  
とうございます。

振り返ってみれば、皆さんが過ごした高校生活の多くは新型コロナウイルス禍に  
縁どられた日々でした。

高校最後の1年こそ、5月に感染法上の位置づけが5類となりコロナ禍前の日  
常を徐々に取り戻していきましたが、1・2年生で十分な経験のない様々な活動を  
どう自分たちで作り上げていけばいいのか、かえって大変な思いをしたのではな  
いでしょうか。

この時代を、遠い将来から振り返った時、果たしてどう言い表すのでしょうか。日常生活においていろいろなことが制約され、本来“密”であるべき青春も、学校行事の中止や縮小、延期を余儀なくされてしまったことがたくさんありました。

こうした中で、知らず知らずのうちに不要な息苦しさに苛まれることがあったことでしょう。忘れもしません。昨年4月の開校記念行事、青陵中学校との合同遠足。歌垣山の山頂で生徒会長の古賀孝太郎さんは「僕たちは大変な時代を生きてきた」とそのうっ憤を晴らすべく中高合わせて1000人の大合唱を先導してくれました。

コロナ禍はじわじわと、しかし確実に皆さんを疲弊させてきました。しかし皆さんは毅然とそれに対峙し、乗り越え、新しい価値観を創り上げていこうとしました。その姿に私はたくましさとしなやかさを感じました。



部活動や課外活動の成績・成果、そして大学入試等、進路希望の達成において、例年どおり、いや例年以上に輝かしい結果を残してくれました。

皆さんが過ごした3年間で、本校もどんどん新しい“武雄高校らしさ”を確立し始めることができました。例えば、高校時代の学習履歴やこれからの学修計画を幅広く評価する総合型・学校推薦型入試に挑戦する人が徐々に増えてきました。

これは本校の強みである“体験”を“経験”に変える学びが武高文化、武雄高校が大切にしている共通の価値観になりつつある証拠だと感じます。

武雄高校は学問的に深みのある授業はもちろんですが、部活動や生徒会活動、そしてまちづくりなどの課外活動を大切にしています。

県内外における試合や大会、各種講座、イベントへの参加など、たくさんの方がこの3年間でそうした活動や学びの場を経験し、多くの気づきを得たのではないのでしょうか。



このように、皆さんが歩んだこの道のりは、「探究を習慣として学びを進める学校」として新たな武高カラーを生み出しつつあります。「探究」とは「深掘り」です。それは学業にせよ、部活動にせよ、その他の課外活動にせよ、自分の興味関心のある分野で「自ら立てた問いを考え続けること」です。

もちろんその問いは、時点、時点で修正され差替えられていくものです。皆さんはきっと、卒業後も、自分の興味・関心を大事にしながら、その問いを大切に育てていくことになります。



元来、青春とは柔軟な思考ができる時代であり、与えられた環境を克服していく力が強いものなのでしょう。皆さんを見ながら、これまでのやり方が常識と疑わなかった大人の私たちにも“そもそもそれは何なのか、なぜ必要なのか”という新鮮な問いを、陰に陽に、自然な形で投げかけ、新しい常識の創造へ思いを至らせてくれたことに大いに感謝しています。

実はこうした「問いを生み出す力」こそが、混迷の時代と言われるこれからを生き抜く重要な礎となっていきます。日本を代表する文芸評論家の小林秀雄は言っています。

「僕ら人間の分際で、この難しい人生に向かって、答へを出すこと、解決を与えることはおそらくできない。ただ、正しく訊くことはできる。（中略）取戻さなければならないのは、問ひの發明であって、正しい答へなどではない。今日の學問に必要なのは師友ではない、師友を頼まず、獨り「自反」し、新たな問ひを心中に蓄える人である。」

これは小林秀雄が書いた『本居宣長 補記』という書物にある一節です。この言葉に、私はまさに現代的な意味を感じています。

答えを出すこと、正解を覚えることに汲々としていた生き方はもう終わりにしましょう。卒業後は、自ら問いを生み出す日々であってほしいと思います。

問いとは、対象と自分との間にある違和感や意外性の中から生まれてくるものです。初めに問いありき、ではありません。

その意味で、今、紹介した小林秀雄の言う「正しく訊くこと」の意味を考えてみてください。この場合の「訊く」は言片の「訊く」、「問う、尋ねる」という意味の「訊く」です。

「正しく訊く」の「正しく」とは正解・不正解の意味ではありません。対象と正面から真摯に向き合い、「何か変だな」「今自分はこう考えているけれど、それとはちよつと違うぞ」という感覚を大切にすることです。そこに生じた差異を面白いと感じ「なぜだろう」「どういうことかしら」と「訊く・尋ねる」ことこそが“問い”なのです。

小林秀雄はそれを「問ひの發明」と言っています。そして、そのためには「獨り自反」する、「自反」とは「自ら、反省する・内省する」、すなわち、自分自身の内面への意識を大切にすることが必要だと説いているのです。自らの内側に向けた意識のベクトルを持てる人は必ず強い人です。

そこで、皆さんとお別れに当たり、次の言葉をはなむけとして送りたいと思います。

「今はただ一人黙して歩め」。

御船山は、武雄の象徴であるとともに、近代日本の幕開けの象徴でもあります。その御船山の懐で学んだ皆さんにとって、今まさに、TAKEO Future Frontier “TAKE OFF!” 武雄高校から未来の開拓者として飛び立つ時です。



しかし、これからの人生で皆さんはさらに高く、さらに遠くまで飛び立たねばなりません。そのためにも、時には「ただ一人黙して歩む」ことが必要なのです。

「黙して歩む」とは小林秀雄の言う「自反」です。「一人黙して歩む」ことは、ある意味、他者と協働すること以上につらく苦しい営みです。より高く遠くまで飛ぶためにはそれに耐えなければなりません。

どうか、この言葉を胸に、御船山を振り返りつつ、3年間登下校に骨を折った最後の武高坂を下りてほしいと思っています。

結びになりますが、保護者の皆様、お子様のご卒業、誠におめでとうございます。在校生及び3年担当者をはじめ職員一同、心からお祝いを申し上げます。保護者の皆様にはこれまで物心両面にわたり、本校教育活動への御理解と御協力を賜り、誠にありがとうございました。コロナ禍の中、皆様の御支援なくしては本校の教育活動をこれほど円滑に進めることはできませんでした。高いところから恐縮ではございますが、この場を借りて厚く御礼申し上げます。今後、お子様のますますのご活躍を心から応援し、祈念しております。

卒業生の皆さん、今日家に帰ったら、ぜひお家の方に一言御礼を言ってください。「これまでありがとう」と。できれば手を握って。皆さんが生まれたときは柔らかかったその手も、きっと今はガサガサごつごつです。その手が18年間皆さんを育ててきた手です。皆さんを高校に通わせるために大変な苦勞をなされた手です。どうか手を握って差し上げてください。

では、卒業生の皆さん、お別れです。また会える日を楽しみにしています。それまで元気に「自分の問い」の発明に励んでください。

「今はただ一人黙して歩め」。卒業おめでとう。

